



いま 現実を生きる力を育む読書の旅

～子どもの成長と「行きて帰りし」物語～

2019/11/19 スクールFC 平沼 純

■ よくある質問へのお答え—子どもたちとの対話より

Q1「本って、読まないといけないもの？」

……「読まなくてはいけないもの」、「義務化されたもの」ではないけれど、でもやっぱり読んでおくと何かといいことが多いです！

Q2「じゃあ、本って読んだらどんないいことがある？」

……いろいろあるけど、一番は「自分なりの視点が身につくこと」、「視野が広がること」、もっと言いかえると、「自分が生きる世界を見る目が豊かになること」です！

Q3「高学年になったら絵本は卒業しないといけない？」

……そんなことはありません！ 高学年でも、大人でも楽しめるレベルの高い絵本—もはや一級の「アート作品」と呼べるもの—もいっぱいあります！

Q4「厚くて長い本、字ばっかりの本を読まないといけない？」

……そんなこともありません！ ただ長いだけで面白くもなく、中身のない本なんていくらでもあります。逆に、短くてもとても奥深い本もいっぱいあります！

Q5「どんな本がいい本？」

……難しい質問ですが、基本的には「ベストセラー」よりも「ロングセラー」がおすすめ。でも自分が本当に、心から楽しめる一冊を探すことが大切。あとはバランスよく！

■ わらべうた 童唄から「耳からの読書」へ—グルーミングの場としての家庭

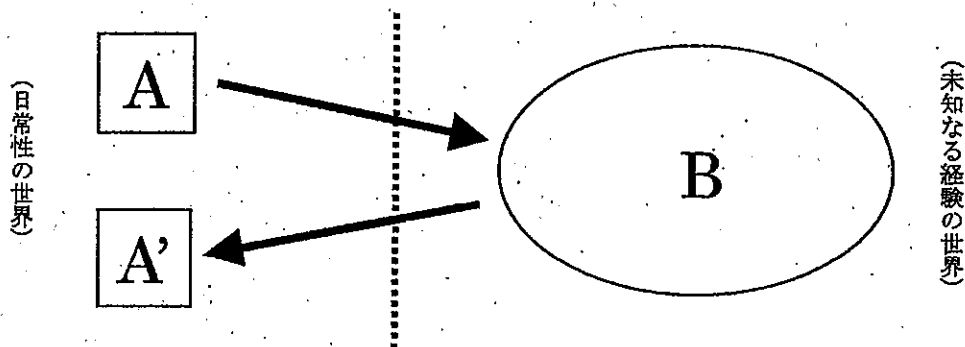
- ・赤ちゃんに必要な大人の「抱擁」、「笑顔」、「語りかけ」がすべて入っているのが童唄
- ・日本の童唄から欧米のナーサリー・ライムまで、「知識」でなく「体験」として言葉に触れる大岡信（1931～2017）……「ことばは知識ではなく、体験である」
- ・「グルーミング」……霊長類の毛づくろい行動。人間は言葉でもグルーミングができる
元上野動物園園長の中川志郎氏、霊長類学者の河合雅雄氏が共通して強調
- ・物語を語ってくれる大人が、子どもにとっての「帰る場所」をつくる
- ★「耳からの読書」のポイントあれこれ……

- (1) あくまで「自然な声音」が一番
- (2) テレビなどを消した、静かでリラックスできる環境で
- (3) 高学年、中高生、大人一何歳で行っても構わない
- (4) D. ペナック『読者の権利 10 ヶ条』—つまらなければ本を変える自由もある
- (5) 長い話であれば「説明十一部朗読」
- (6) 「耳からの読書」は物語でなくてもかまわない
- (7) 読後の余韻を大切に（大村はま「お説教は子どもが一番嫌い！」）
- (8) 相応しい本……言葉に「進行感」と「シンプルさ」がある（例：瀬田貞二訳）



■ 物語における「行きて帰りし」…… “there and back again”

- ★『アンガスとあひる』、『ピーターラビット』などに見られる「行って帰る」構造
行った先で世界の茫漠さ、自然の摂理、現実の厳しさなどを実感・経験
- 実は映画『男はつらいよ』、聖書「ルカ伝」、紀元前ホメロスの叙事詩にも見られる
- ★瀬田貞二氏の言葉……「子どもとは大抵、『行って帰ってくる』を日々くり返している。」
河合雅雄氏の言葉……「冒険心は若い者の特権である。」「文化を作るのは若い世代。」
- ★行った先でさまざまな経験をし、そこで得られた新たなまなざしを持って現実を生きる
読書という行為自体が、子どもにとって大いなる「行って帰る」冒険



- ★子どもにとっての「安全地帯」＝物語を語ってくれる大人
物語体験を積み重ねることで、自分にとっての「帰る場所」を確認
- ★子どもは「帰る場所」がないと安心して冒険できない
- ★愛情を蓄える→「行って帰る」旅をくり返す→やがて自分が誰かにとっての「帰る場所」に……

補足資料集

■幼い、いちばん年下の子どもたちが喜ぶお話には、一つの形式というか、ごく単純な構造上のパターンがあるんじゃないかなということ、このあいだうちからだいふ考えていたもんですから……（中略）……で、その構造上のパターンというのは、「行って帰る」ということにつけるのではないか、それがぼくの立てた仮説なんです。

（中略）

人間というものは、たいがい、行って帰るもんだと思うんです。それは幼児体験のほうに行って戻ったり、さまざまあるでしょうが、小さい子どもの場合は、単純に、自分の体を動かして行って帰るという動作がとて多いわけですね。子どもの遊びを見ても、「花いちもんめ」なんて、こうずっと寄って行っては帰ってくる。そういう型のものが、単純な遊びのなかにはずいぶんあるように思います。



そんなふうに、しょっちゅう体を動かして、行って帰ることをくり返している小さい子どもたちにとって、その発達しようとする頭脳や感情の働きに即した、いちばん受け入れやすい形のお話ということになりますと、ただ一つの所でじっとしているんじゃない、こりゃ話になりません。とにかく何かする、友だちの所へ言ったり冒険したりする。そしてまた帰ってくる。そういう仕組みの話をお好むのは、当然じゃないでしょうか。

■冒険心こそ若者の特権である。子どもを安全の柵の中のみ押しこめるようなことは、子どもを委縮させ創造の芽を摘みこそすれ、他に益することは何もないであろう。

■地縁に基づく故里は、都市化し移動性が高まると共に消失し、現代は故里喪失の時代だ。そんなとき、心の故里を幼少期にしっかり記憶の深奥にとどめておくことが大切だ。それが家庭という育ちの場の役割である。

■育児における重要な課題の一つは、子どもを密室文化の檻から抜け出させることだ。追い出してはならない。彼らの密室よりもずっと居心地のよい場を設定することだ。居間がその役目を果たす空間にならなければならない。家族団欒の場とは言い古された言葉であるが、要するにグルーミングの場なのである。(中略) グルーミング、つまり毛づくろいしあうなどの直接肌がふれあう行為はないけれども、その代り言葉で語りあうことにより、お互いの心を通わせるということができる。サル類にはできない、人間特有の大切な社会的機能である。その機能を十分生かすことこそが、人間性を豊かにすることに他ならない。

居間はおしゃべりで賑わう場であるとともに、沈黙が親しさを深める場でもある。サルたちはよく互いに鳴き交すが、寄り集まったときは声を出さない。グルーミングのとき発声を伴うことはないし、ただ近くに座ってぼうっと休んでいることが多い。濃い血縁の者が近くにいるというだけで、親密な安定した空間ができるのだ。居間の機能がそうだ。母親が編み物をし、父親は新聞を読んでいる。子どもは漫画を見たりパズルをしている。ときどきごく短い会話が花から花へ飛び移る蝶のように飛び交う、ごく平穏な日常の光景である。このごくありふれた日常性の回復こそが、今求められていることではないか。

(河合雅雄『子どもと自然』岩波書店より)

■私たちはもう、子どもだましはやめましょう。刺激だけでごまかすことをやめましょう。着色菓子の
ようなもの、ピラピラしたもの、けばけばしいもの、おどかさだけのもの、支離滅裂な
もの、だらしのないものを、本とよぶことをやめましょう。それらを出版して、一度だ
けであきられて捨てられるような商利主義とおろかな無駄づかいを断ち切りましょう。
その反対に、子どもたちを静かなどころにさそいこんで、ゆっくりと深々と、楽しくお
もしろく美しく、いくどでも聞きたくなるようなすばらしい語り手を、私たちは絵本と
よびましょう。よい本というものは、どれもみなすばらしい語り手たちです。

(瀬田貞二『子どもの本評論集 絵本論』福音館書店より)

■ D. ペナックの「読者の権利 10 カ条」

1. 読まない
2. 飛ばし読みをする
3. 最後まで読まない
4. 読み返す
5. 手当たり次第に何でも読む
6. ボヴァリズム (小説に書いてあることに染まりやすい病気)
7. どこで読んでもいい
8. あちこち拾い読みする
9. 声を出して読む
10. 黙っている

(D. ペナック『奔放な読書一本嫌いのための新読書術』藤原書店より)

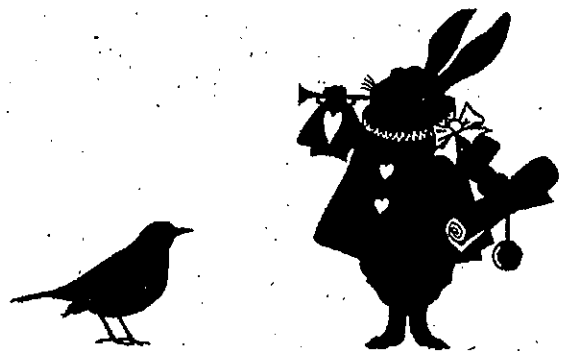


■『子どもを本好きにする10の秘訣』（実務教育出版）より
子どもが本を一生の心の友とするために……

1. 日々、子どもとたっぷり会話しよう
2. 毎日、テレビやラジオを消した静かな時間を、ある程度は作ろう
3. 自然な声音で読み聞かせをしよう
4. 「ご飯の本」と「おやつの本」のバランスを大切にしよう
5. ときには子どもの選択も尊重しよう
6. 家族で図書館や本屋に行こう
7. 現実と結びつけよう
8. 絵や音楽、伝統芸能など、ほかの芸術にも触れさせよう
9. 感想を無理に聞き出さないようにしよう
10. まずは大人自身が楽しもう

「—だからね、若いきょうだい、君も来たまえ。時は待っていないし、南の国は、
きみをよんでいるのだ。二度と帰らない時が行ってしまわないうちに、冒険してみ
るんだな！ただ戸を一つしめて、陽気に一歩ふみだせば、それでいいんだ！古い
生活にかわって、新しい生活がはじまるのさ。」

(K. グレアム/石井桃子訳『たのしい川べ』岩波書店より)



保護者の皆さま

令和元年 12 月吉日
世田谷区立京西小学校
PTA 会長 山口 健太郎
文化厚生委員長 川田 蘭

令和元年度 第 3 回家庭教育学級（講演会）報告書

日ごろより、PTA 活動にご理解、ご協力いただきまして誠にありがとうございます。
11 月 19 日に京西小学校多目的室にて、第 3 回家庭教育学級として、花まる学習会
スクール FC 平沼 純氏をお招きして【現実（いま）を生きる力をはぐくむ読書の旅】
～子どもの成長と「行きて帰りし」物語～ 講演会を開催しました。

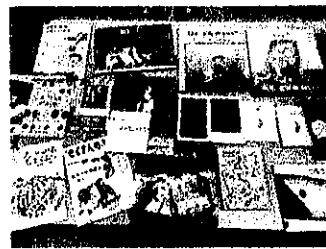
当日は、ご来賓および保護者の皆さまで 60 名を超える方々にご参加いただきました。
多くのお子さんをご指導されているご経験から、子どもたちが夢中になる本、大人が
読んでも面白い「ロングセラー」の本を参考資料と共に数多くご紹介いただきました。

読書の意義、喜びとは、「自分の生きる世界を見る目が豊かになること」であり、本
の厚さやジャンルにこだわらず、興味のあるところから伸ばし、自分が心から楽しめる
一冊を探すことが大切とのお話でした。

また、「耳からの読書」（読み聞かせ）は、子どもが自分に時間を割いてくれる喜び
を感じるグルーミング（動物の毛づくろい行動を指すが、人間は言葉によりお互いの心
を通わせることができる）の時間であり、心の「帰る場所」をつくってくれます。

読書は、子どもたちが物語の中で冒険や経験をして、元の場所へ帰る、「行って帰
る」をくり返し、現実（いま）を生きる力を育ててくれることを教わりました。

改めて読書の可能性を考えさせられる貴重な時間となりました。



※裏面にてアンケートに寄せられたご感想を一部ご紹介いたします。



ご参加いただいた保護者の皆さま、アンケートにご協力ありがとうございました。

～講演会についての感想～

- ・絵本の奥深さを改めて感じました。グルーミングの時間を大切にしたいです。
- ・耳からの読書を、これからも続けようと思います。
- ・ベストセラーよりロングセラー、今後の本選びの参考にします。
- ・読み聞かせの本選びに、とても役に立ちました。翻訳比較もとても分かりやすく、「7匹のこやぎ」の話が面白かったです。
- ・子どもは絵本の絵をよく見ていること、言葉のリズムや音に興味があることを初めて知りました。
- ・ただ「本を読みなさい」と子どもに言っていたことを反省しました。
- ・高学年になったから、絵本ではなく、字の多い本を。と決めつけていましたが、好きな本を好きなだけ読むことが大事だと思いました。
- ・読書についての固定概念が少し外れました。
- ・本を読ませなければ・・・と思っていましたが、少し気が楽になりました。もっと自由に楽しみたいと思います。
- ・「相手は子どもなんだぞ」という言葉に、ハッとさせられました。
- ・「つるにようぼう」の挿絵にも注目してもう一度読んでみたいと思いました。
- ・絵本の挿絵やその本が作られた過程まで、考えたことがなかったので、今後はそこにも目を向けたいと思います。

